おかげで，名前だけでこれまで実際に見たこともないたくさんの属の姿や特徴を，視覚的に確認することが可能になった．写真や線画をマメ科全体にわたって，セットで完璧にそろえた点は，これまでに全く類書がない．本書の大きな特徴である．

1978年7月にR. Polhill博士が中心となって第1回国際マメ科植物会議がKewで開催された．その当時のマメ科全体の分類学的見解は，Advances in Legume Systematics, Part 1 (Polhill & Raven eds., 1981) にまとめられ，これがその後約20年間のマメ科の分類学的研究の基礎となってきた．1981年以降は，Advances in Legume Systematics シリーズの Part 3 (1987)～Part 10 (2003) をはじめ，数多くの研究成果が出版・発表されてきた．この研究の流れは「20世紀後半におけるマメ科分類学の進展, Advances in Legume Systematics シリーズの紹介を含めて」として大橋先生によって本誌**77**: 1–8 (2002) に紹介されている．本書はそれらの成果にもとづいた分類体系の集大成であり，21世紀におけるマメ科研究の基礎になる大変重要な出版物である．

本書はマメ科の研究者にとって，分類学者に限らず，必携の出版物であるが，写真と線画でマメ科以外の研究者の方々にも十分楽しめるものと確信する．ひょっとすると，本書がきっかけで，マメ科に魅了される研究者の方がおられるかもしれない．世界中のマメ科の属がわかるので，ハーバリウムにもぜひ一冊常備してほしい出版物である．カラー写真が多い割に値段はだいぶ低めに押さえられており，コストパフォーマンスは悪くない．

私は，中身もさることながら，表紙あるいは裏表紙をめくると目に飛び込んでくる莢や種子の多彩なタペストリーが大変気に入っている．マメ科のもつ形の魅力がちりばめられている．これは編集者の一人G. Lewis氏が世界各地で入手した収集物をもとに，美しくかつ興味深く配列し，画家に描かせたものである．ここにも象徴されるように，隅々にも編集者のセンスを垣間見ることができる魅力ある美しい一冊である． （根本智行）

□**加藤僖重：「野草」植物名総索引．第1巻～第70巻** 128 pp. 2006. ¥3,000. A5版．野外植物研究会．ISBN: no number.

80巻5号で紹介した「野草」総索引は，表題を著者別に並べたものだったのに対して，これは表題中に現れる植物名を拾って，和名の50音順に配列し，著者，年，巻号頁を示したものである．野草には新名，新産地の報告のほか，普通の本には載っていないタクソンの形態的特徴，奇形などの観察記録がたくさん出ている．私が同誌に「名前を考える」を書くきっかけになったクニタチカタバミについても，檜山氏がすでに記録しておられたことをあらためて知り，もっとしっかり読んでおけばよかったと思った．

前回にも記したが，加藤氏は表題や副題のみでなく，文中の「見出し」に相当する文字列まで拾っているので，自分の知りたいトピックについて検索するのは，これまでよりはるかに楽になった．こういう観点からすれば．植物名ばかりでなく．それがどんなトピックの下に書かれているかも表示されていれば．さらに便利だと思うが．これは隴を得て蜀を望むというたぐいだろう．謄写版刷りの野草の利用価値を．更に高めるものである．

残るは採集・観察記に現れる植物名で，過去の産状を知る上で重要だが，これは本文中の植物名を拾えば済むというわけには行かない．というのは，Aを得て「Bとの違いは」とか「B，C，Dはなかった」というような記述が少なくないから，一々取捨選択せねばならないのである．私も過去に試みたことがあるが，あまりの面倒くささに挫折した．ともあれ，加藤氏のご苦労に対し， 絶大な敬意を表する．つけ加えれば，この仕事は二件とも，加藤氏の私費による産物である．野外植物研究会の連絡先は次のとおり．〒180-[illegible] 武蔵野市[illegible]

（金井弘夫）